

# 歩き出した国大化学会

国大化学会副会長 米屋 勝利（昭和 37 年電化卒）

第 1 回国大化学会総会は平成 19 年 6 月 30 日（土）に開催され、多数の参加を得て成功裏に終了することができた。これは、この総会が同窓会統合という大事業後のキックオフ総会であり、古参の卒業生には懐かしい横浜崎陽軒という会場設定、それと国立歴史民族博物館教授今村峯雄氏（昭和 40 年応化卒）の「化学と歴史の接点」と題する興味深い特別講演企画等々によるものと推察される。しかし、大事なことは、この総会で樋口会長から提示された方針とそれに基づいて設定された具体的な施策を如何にして着実に実行し実現するかであろう。その第一段階として即座に取り組むべきことは、①11 月 10 日（土）に開催される第 2 回横浜国大ホームカミングデー（HCD）を成功させることと、②会員間の有機的なネットワーク作りの 2 点であろう。

今年度の HCD は、樋口会長が実行委員長となり、大学教職員、学生、同窓会で構成される実行委員会が中心となって「横浜国大いいとこ発見デー」をスローガンとして種々のイベント企画が進められている。会場は横浜国大体育館、研究室、キャンパス等を広く使って、1,500 名の参加者を目標にしているとのこと（第 1 回：870 名）、活気あふれた交流会になるものと思う。昨年度は現場教職員の参加が少なかったのが気になる所だが、国大化学会では現職教員も正会員となっているので、多くの方が HCD に関心を持って参加いただけるものと期待している。

会員間ネットワーク作りとは、国大化学会の構成メンバーである大学教職員、学生、卒業生間で有機的な血の通った絆をつくりあげてゆくということである。これは言うは易いが実行はなかなか難しい。思い起こすと、私の学生時代（昭和 33 年～37 年）は同期生間の結びつきが非常に強かった。それに加えて研究室としての絆も深かったので卒業後も縦横のつながりがかなりうまく保たれてきたと思う。しかし、若手特に平成以降は同期の絆は非常に薄いと聞いている。同窓会が統合する前の横国化学会（若手中心の会）ではこのことが最大の課題であり、榊会長は大変苦慮していたようである。研究室内での縦糸のつながりはそこそこに保たれていたため、連絡は主としてこのルートで行われていたが、若手にはクラス幹事がいなかった。時代が違うといってしまうまでもだが、新しい国大化学会としては、何とか卒業年度毎に実のあるネットワークを築くことができないものか、そのためには一体どうすれば良いのかについて知恵を出さなければならない。



人々の絆とは人との出会いから始まる。以下、私が育ってきた流れを学生時代から思い起こしながら人との絆について述べてみたい。

### (1) 電化学生時代の仲間たち

一般に、大学への入学は人生において最大の出発点であり、自己形成・自己実現はここから始まるといっても過言ではあるまい。私が電気化学科（電化）に入学した昭和 33 年頃は電化と化工（当時は化学工業科）の総勢 70 余名が合同で受講する科目が多かった。そのためまとまりの良い集団であり、クラスメンバー間では今なお親友として或いは同期生として交流が続いている。私自身は田舎者で人付き合いが下手であったが、それでも新しい多くの仲間を得て徐々に打ち解けていった。その結果、経済的には苦しい中でも充実した学生生活を送ることができたと思っている。授業時間の合間や昼休みには、学生服を着た仲間たちが弘明寺本館前のクローバの上に転がって談笑したり、仲間の囲碁勝負を囲んでいたように記憶している。今では考えられないのどかな風景であった。今年 5 月 27 日（日）に中華街で久しぶりに電化・化工合同の昭和 37 年卒同期会が開催された。同期生は日本全国に散らばっているにもかかわらず 35 名もの大勢が出席した。卒業以来初めてという仲間もいた。会った時には思い出せない人もほんの一瞬で昔の顔が鮮明になってくる。お互いの談笑で予定時間はあっという間に過ぎてしまった。会が終わるころになると「次回は何時にする」、「今度は温泉 1 泊旅行がいい」などと盛り上がった。これが、学生時代のクラス仲間の強い求心力によるものであることは間違いない。

## (2) 部活動を通しての仲間たち

私は部活動としてワンダーフォーゲル（ワンゲル）部に所属した。ここでは、電化・化工のみならず全学を通して忘れ得ない多くの仲間を得た。卒業するまでの4年間テントを担ぎなべ釜を持ちながら、近くは丹沢から、北、南、中央アルプス、ハヶ岳、さらには東北の山々に登り、秘境の温泉などを訪ねて歩き回った。荷物を担ぐのは大変であったが実に愉快であった。それにしても汗びっしょりの汚い服を着て数日間仲間との共同テント生活などは現在では考えられない。卒業後はワンゲルOBとなったが、高齢期になると何人かの我慢できないOBたちは、「シニアOB会」を立ち上げた。現在では月例（毎月1回）登山が約100回を迎え、毎年シニアOB総会を行っている。参加者は月例が毎回平均約30人、総会は約70名、これは大変なことである。これも学生時代に出会った仲間たちのどうしようもない強い絆に由来するものであろう（補足：私は劣等生、年に1,2回程度の月例登山参加が精一杯であることを付記しておく）。

## (3) 横浜国大卒業後の仲間たち

昭和37年に電化を卒業して東芝に入社。それから27年を経て、再び母校の横浜国大工学部材料化学科に教官として戻ってきた。平成16年3月に定年退官し、その後特任教授（産学連携と研究開発）として今日に至っている。東芝時代が27年、横浜国大に戻ってから定年までの15年間、大変多くの出会いがあった。研究室を巣立っていった学生たちも100数十名に及ぶ。ここではそのことを詳細に述べる余裕はないので、電化卒業生としての思い出と人のつながりについて一つだけを紹介する

にとどめる。

当時、東芝には横浜国大卒業生が非常に多く、とりわけ電化率は多かった。故人になられたが、東芝には電化の大先輩として菅要助（当時常務取締役）さんがおられた。菅さんは横浜国大卒の若い新入社員や若手社員を集めて、ことあるたびに同窓卒業生の絆の重要性を呼びかけてこられた。「真空（まそら）会」という若手だけの夕食会（会場は品川にある東芝高輪クラブ）を発足させ、いろいろな話題で交流会が行われた。若い我々に向かって、「とにかく会に出ておいでよ。同窓の会は参加して先輩と後輩の仲間たちが語り合うことに価値がある」とおっしゃっておられた。紙面の関係で省略するが私には忘れ得ない人の一人である。

以上、私が横浜国大への入学・卒業を通して得てきた仲間たち、同窓生・同期生としての絆について事例を紹介してきた。こうした絆は偶然横浜国大に入学して始まった縁であり、いわば自然発生的に生まれたものである。こうした仲間たちの集まりである国大化学会総会やHCDも出席してみればこれまた楽しである。私の故郷方言では「おいでませHCDへ、おいでませ総会へ」ということになる。ともかく、仲間同士のつながりを楽しむことができれば素晴らしい集団へと発展できると信じている。この具体的な仕掛け人が「クラス幹事」ということになる。「クラス幹事」についてはいずれ場所を改めて触れたいと思うが、まずは国大化学会の潤滑剤として力を貸していただくことを切にお願いする次第であり、合わせてHCDで仲間の楽しい集いが実現できることを祈念して私の挨拶を閉じることにする。